

## 「古代遺跡発掘について～深草弥生遺跡を中心に～」

はじめに～お話ししたいこと～

- ・古代遺跡発掘の楽しさ 発見する喜び 歴史(教科書記載)を変える可能性)人々の営みが形で残る
- ・弥生時代は何年前? 最近の歴年代研究成果 縄文と弥生の違い
- ・深草弥生遺跡が全国的に有名な遺跡なのはなぜ?
- ・深草弥生ムラの人々はどこから来て、どのような生活をしていたか? 遺跡の歴史的意義は?

### 1 弥生時代とは

- ・名前の由来は、東京都本郷弥生町の地名 明治 17 年最初の弥生土器発見地「弥生町遺跡」(石川 2008) <縄文土器とも埴輪とも違う土器>
- ・時代は、従来紀元前 5 世紀～紀元 3 世紀前半とされていたが・・・  
→最近(2003 年以降)の研究では紀元前 10 世紀(北部九州)～3 世紀前半(表 1) ※異論もあり  
自然科学分析による年代測定が精密になり弥生時代早期・前期の年代を約 500 年古くみる研究成果
- ・「水田稲作農業が定着して食糧生産が開始、青銅器や鉄製金属器の使用、ガラスの生産も始まった」、「石器や土器の製作など縄文時代から引き継いだ要素も根強く残る」時代。
- ・日本列島は、水稻農耕を受け入れた九州・四国・本州と受け入れた痕跡のない沖縄の「後期貝塚文化」、北海道の「続縄文文化」の 3 地域に区分(『岩波日本史辞典』1999)  
→しかし東北地方の弥生文化の評価は難しい。水稻農耕と畑作を組み合わせた農耕文化とみる考え(設楽 2013)、地域的な違いをもともと持っていたという考え(石川 2010)があり、まだ定説をみない。

◎弥生時代の深草遺跡を考える上で大事なことは、次の 3 点。

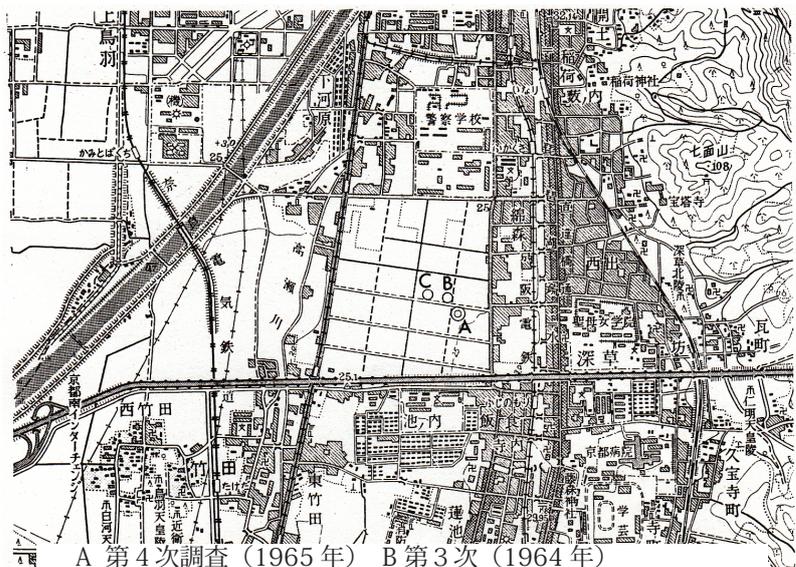
①列島の縄文時代から弥生時代への変化は一様ではなく、各地の環境や縄文時代の伝統との関係に注目しておかなければならない。

②近畿地方においても、前期末～中期初頭は地域社会に個性ある弥生文化が定着する時期で、東日本からの集団の移動を背景に、個性ある地域性は成立したことがわかってきた。

③弥生時代の遺跡にどのような生活痕跡(遺構)があり、どのようなものを生み出したのか(遺物)を調べ、列島規模でその内容を吟味すること。

ポイント：深草遺跡は、日本考古学史上、弥生時代の農耕社会を解明するうえで、はやくから注目された重要遺跡。

分析法：調査のあゆみを振り返り、発見された弥生時代の遺跡の内容をみていくことで、全国的に有名になった背景を確認しておきたい。



A 第 4 次調査 (1965 年) B 第 3 次 (1964 年)  
C 第 2 次調査 (1956 年)  
図 1 深草遺跡の調査地点 (堤 1967)

図2 弥生時代の年代観  
(森岡 2004 に加筆)

下段にある従来の年代観と最近の年代観を比較した表である。弥生時代の始まりは、500～600年古くみられる研究成果が出された。すなわち、これまで縄文時代晩期とみていた時代は弥生時代に含まれることになりつつある。しかし、これは九州北部に限ったことで、西日本以東は、遅れて弥生文化が到達している。

世紀	~26	25~21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	
西暦	2500		2000			1500				1000			900		
中国	仰韶文化		龍山文化			夏				商			1072		
韓国	出来事									995 齊の太公望 呂尚死す			841 共和元年 史料年代		
九州北部	時代区分		縄文時代												
韓国	時期区分		中期			後期			晩期			早期		前期	
韓国	土器文化出来事								突帯文土器					-	
九州北部	時代区分		縄文時代												
九州北部	時期区分		中期			2470 後期			1250 晩期			早期 (縄1期)			
九州北部	土器文化出来事		南福寺式						黒川式			夜白Ⅱ式 水田稲作の開始 環壕集落の始まり			
西日本	年輪年代など		南溝手遺跡・ 粉痕土器												
関東東北	土器文化出来事		堀之内1式 三内丸山の終焉			堀之内2式			安行1式 加曾利B式			大洞B式		大洞B-C式 大洞C1式	
従来	年代観		中期			後期						縄文時代			
西暦	2500		2000			1500				1000			900		
世紀	~26	25~21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	

実線は土器型式が含まれる可能性がもっとも高い年代幅、破線は、土器型式の推定年代、存続幅

## 2 深草遺跡の発見史～なぜ深草遺跡が注目されたのか～

### (1) 遺跡の発見はいつか？

第1次調査：1946年(昭和21)、伏見区深草西浦町にあった旧練兵場跡の農地払い下げによる開墾で弥生土器、石器など出土。伏見工業高校教員だった辻井喜一郎らが調査し簡易な記録を作成して学術雑誌に報告したことが最初の発見(辻井 1954)。

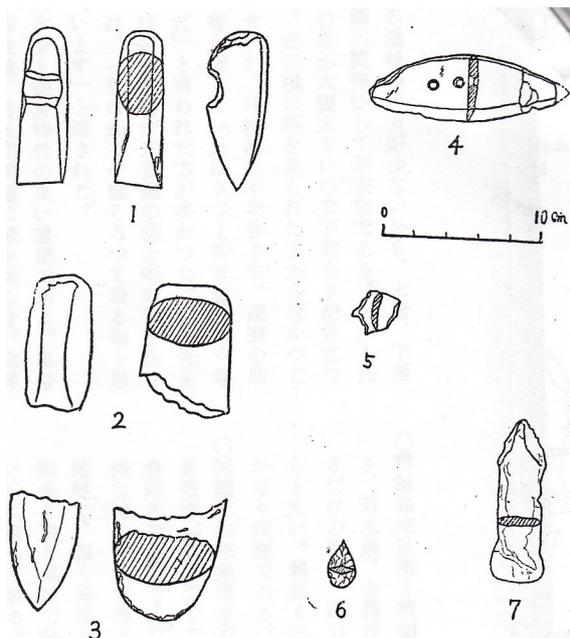
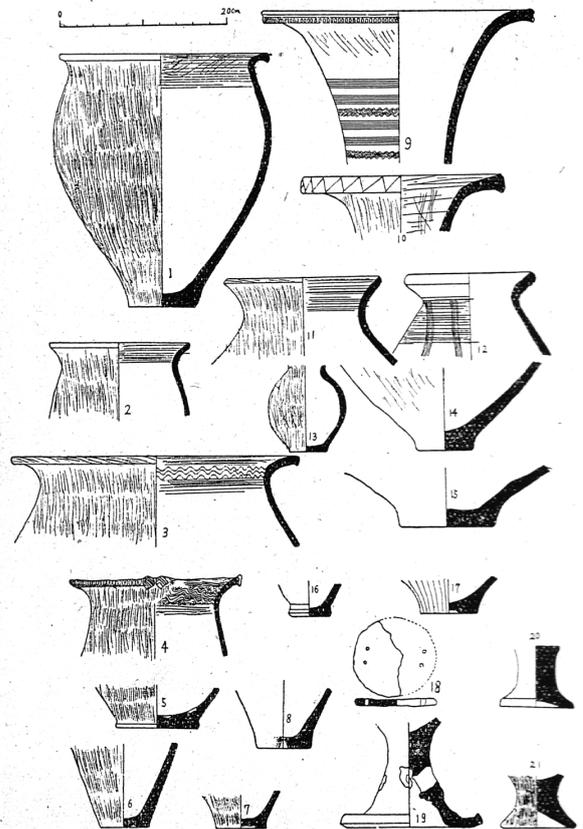


図3 第1次調査の出土遺物 (左：石製品 右：弥生土器 辻井 1954)



8	7	6	5	4	3	2	紀元前	紀元後 1	2	3					
800	700	600	500	400	300	200	100	1	100	200					
770	春秋		403(453)	戦国		221	202	前漢	8	25	後漢	220			
770	651	567	494	越の滅亡		312-279	燕の東方進出		新	14 or 20	貨泉を鑄造				
周の都を洛邑に遷す		齊の桓公、齊の靈公、552 孔子の誕生		山東半島全域を領有		221	始皇帝中国統一		武帝即位	82	馬弩閣廃止				
無文土器時代								三韓時代							
中期				後期											
松菊里式				190 衛満朝鮮建国				108 楽浪郡設置		37 高句麗、楽浪郡を襲う					
82 臨屯・真蕃二郡を廃止															
弥生時代															
前期 (I期)				中期 (II~IV期)				後期 (V期)							
板付 I		吉野ヶ里遺跡の始まり		青銅器副葬の開始		★深草				前漢鏡副葬開始		57 倭奴国王、後漢に遣使			
		445 東武庫		223 下之郷		97-60 二ノ畦・横枕		51+α 大藪		145 大友西		107 倭国帥升、後漢に遣使			
		448 東奈良		245 武庫庄		池上曾根 52		69+α 下鈎		169 〃		177+18 纏向石塚			
大洞 C2 式				大洞 A' 式				砂沢式				終末期			
大洞 A 式															
弥生時代															
晩期				早期		前期		中期		後期					
800	700	600	500	400	300	200	100	1	1	100	200				
8	7	6	5	4	3	2	紀元前	紀元後 1	2	3					

でないことに注意。〔国立歴史民俗博物館 2003〕を一部改変。

→報告文の実測図は素晴らしく精緻な図で内容がよくわかる。弥生時代中期の壺と甕、近江(滋賀県)、伊賀(三重県北西部)の土器。土器によって遺跡の年代が掌握されたことが重要。石器は、石包丁のほか、木材加工用の柱状片刃五石斧、太型蛤刃石斧、打製石剣があり、単なる散布地ではなく集落の存在を推測できた。この成果が公表され、学会に近畿を代表する弥生時代遺跡として認知されることになる。

## (2) 本格的な調査開始

第2次調査：1956年(昭和31)11月13日から10日間。日本考古学協会・明治大学考古学研究室(主任；杉原荘介・副主任：大塚初重)。発掘トレンチを4箇所設定、弥生時代の川跡から多量の弥生土器、石器が出土(杉原・大塚1961)。

概ね、東から西に流れる川は、幅6~7m、深さ1mほど。川の周囲で生活していた弥生人が生活雑器を川に捨てていた状況である。

出土品は、深草遺跡の多様な生業活動を物語る土器や石器、玉が含まれる。石剣は、縄文時代からの伝統、磨製石剣は、青銅武器摸倣の祭祀を行っていたことを推測させる。また、玉は推定碧玉製管玉の製作がおこなっていたことを示す。

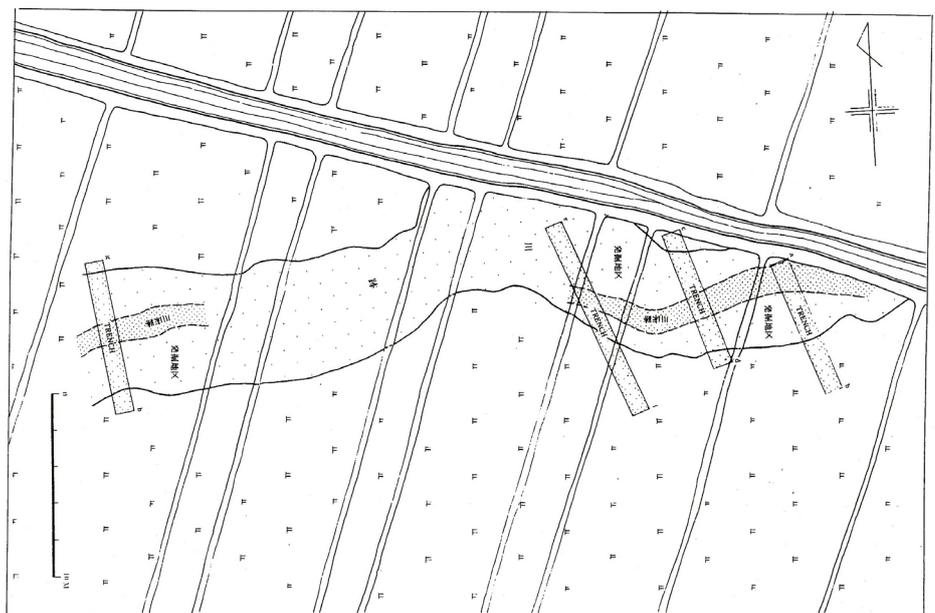


図4 第2次調査の発掘トレンチと川跡(杉原・大塚1961)

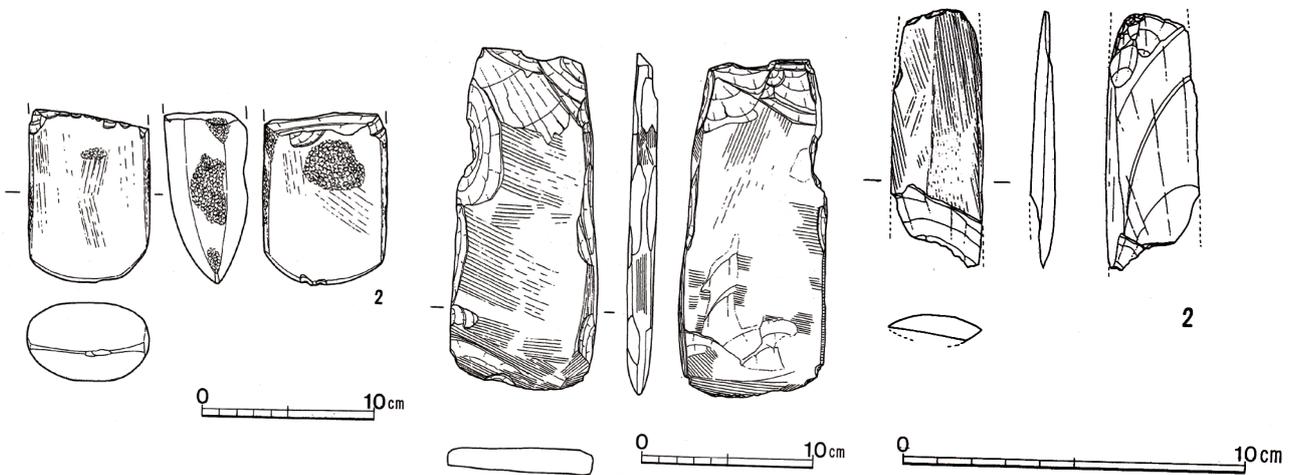
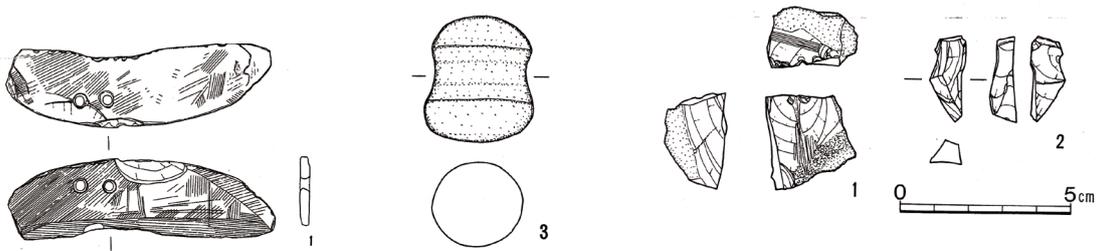
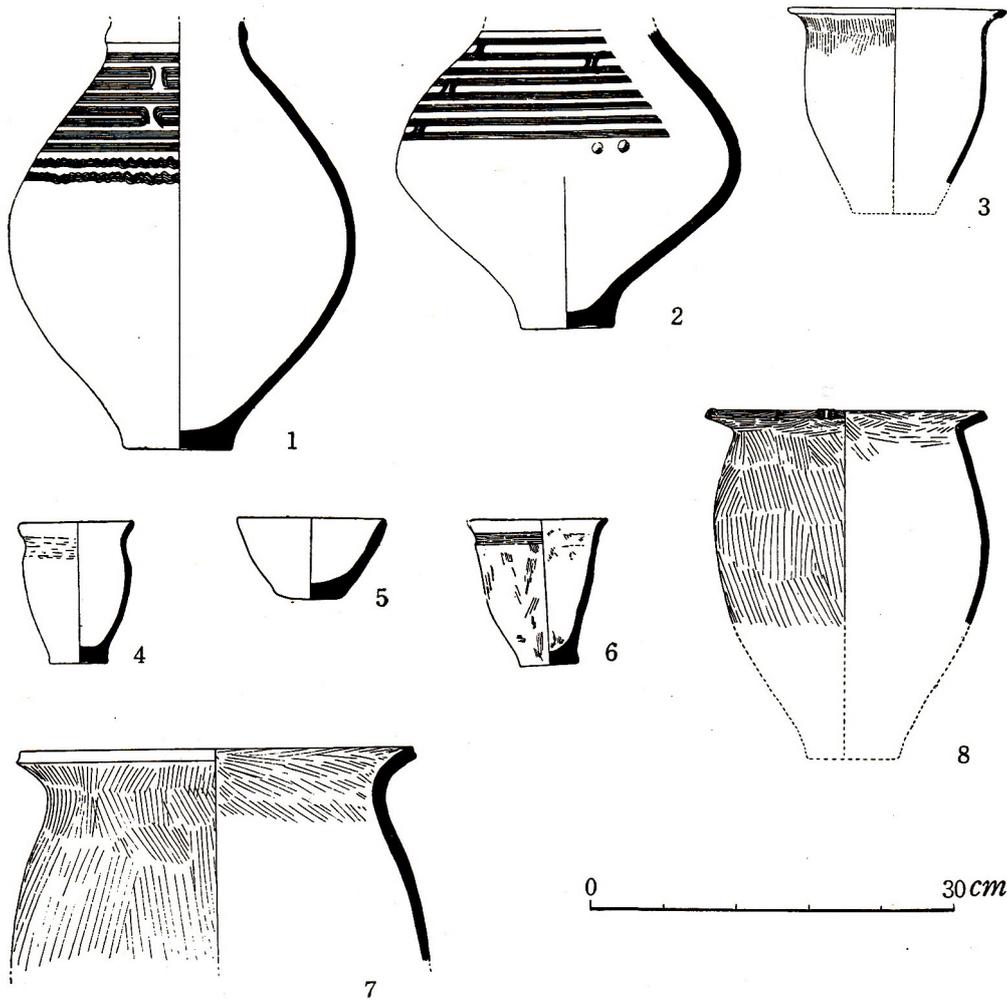


図5 第2次調査出土の弥生土器と石器 (杉原・大塚 1961、安蒜 1970、黒沢 1991)

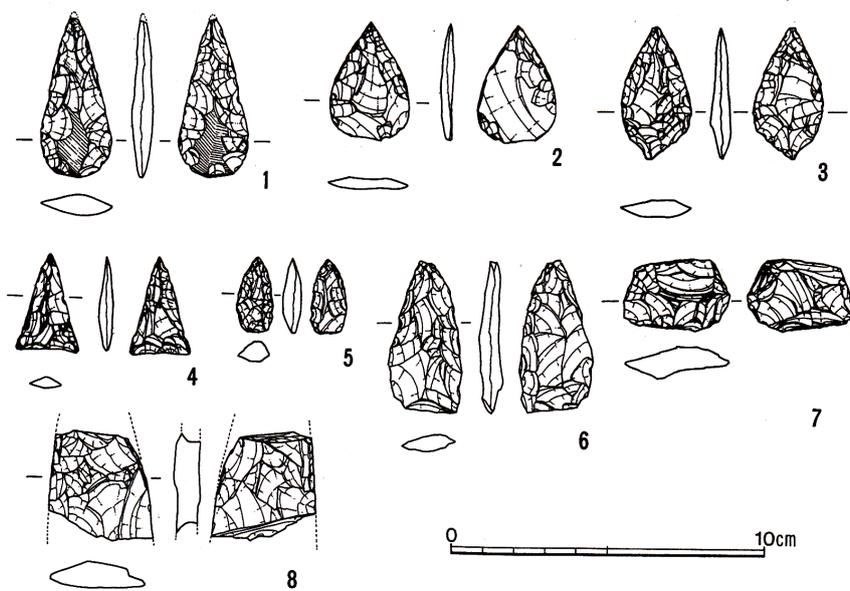


図6 第2次調査出土の石器 (杉原・大塚 1961、安蒜 1970、黒沢 1991)

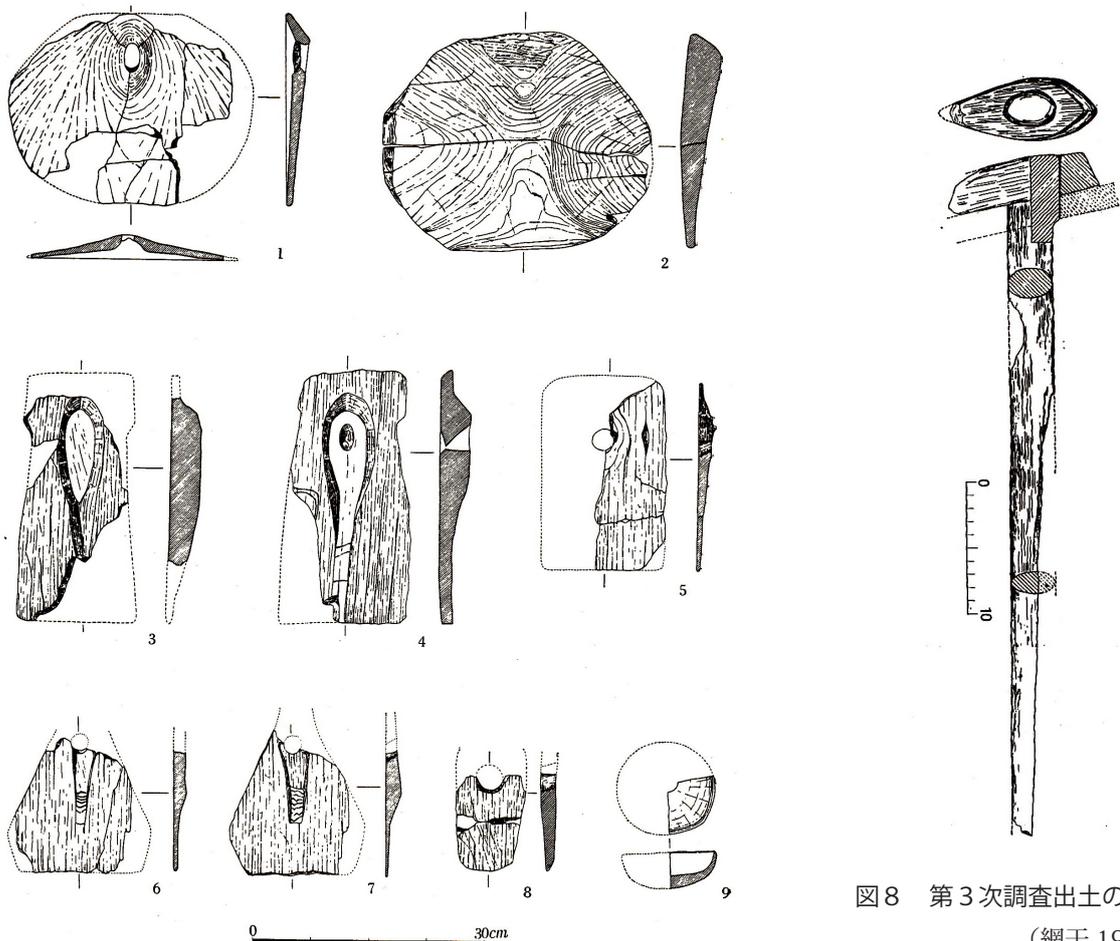


図8 第3次調査出土の木鍬 (網干 1965)

図7 第2次調査出土の木器 (杉原・大塚 1961、安蒜 1970、黒沢 1991)

(3) 枝の着いた鍬の発見

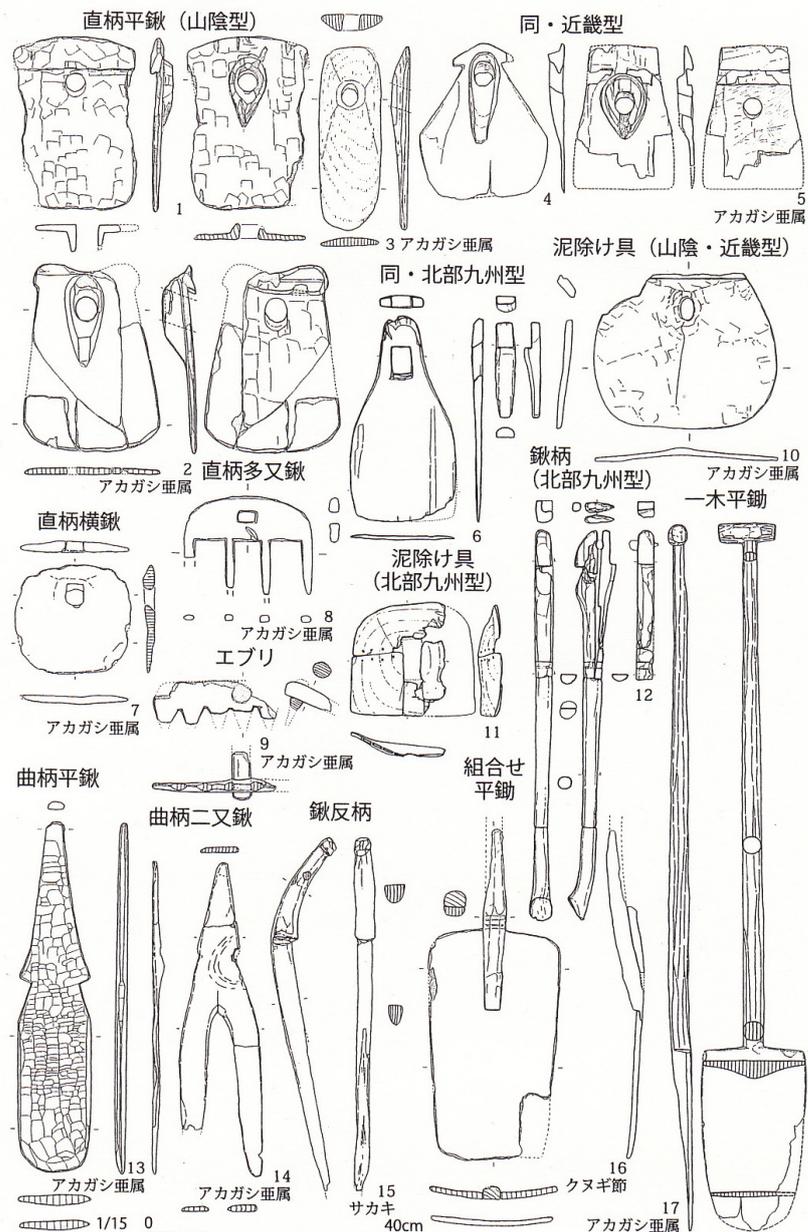
第3次調査：1965年(昭和39)6月20日から1ヶ月、9月20日からの1ヶ月間に龍谷大学考古学研究会(調査指導：網干善教)が調査。弥生時代の溝状遺構から多量の弥生土器、石器、木器が出土(網干1964・1965)。当時、各地で木製農耕具が発見されはじめた頃で、鍬と柄がどのように装着していたか明らかでな

図9 鍬と鋤の地域性  
(樋上 2016)

上段は「掘り起こす」農具である「鍬」、下段は「すき取る」農具である「鋤」。

鍬の形は、地域によって異なる。気候・風土による違いは農具の形を変えた。

深草遺跡の農具は、近畿地方の一般的な勝形の鍬と泥よけがつかわれている。



かった。第3次調査の木鍬は、柄が装着した状態で出土し、学会に報告された(網干 1964)。考古学会は、深草弥生遺跡の重要性を再認識することになる。

(4) 石碑設置の契機となる調査

第4次調査：1966年(昭和41)7月20日～8月5日。電話局建設に伴う事前調査。周知の遺跡として深草遺跡が登録され、京都府教育委員会(担当：堤圭三郎)による調査が行われた(堤 1967)。南北方向の溝から多量の弥生土器(中期～後期)、石器、木器(未製品)が出土した。遺物は、府立城南高校教諭の積竜雄・林和広両氏により整理報告された(林ほか 1974)。第4次調査の成果は、弥生土器の中に東海系土器が含まれることを明確に示したこと、新たに後期の土器を入手したことにある。その後、この地点に深草弥生遺跡の石碑が建立され顕彰されることになる。

第5次調査：1982年10月、府警学校内で調査したが湿地帯であり、集落の居住域ではないことが明らかになった(竹井・黒坪 1983)。

以上の(1)～(4)が深草遺跡に関する主な調査と研究の成果である。最後に、これらの成果を京都盆地周辺の弥生時代の動向と関係づけ、深草遺跡の歴史的意義を考えて見たい。

### 3 深草弥生遺跡の

#### 歴史的意義

以上の調査研究によって深草弥生遺跡は、中期を中心として断続的に後期まで存続した集落跡であったことが明確になっている。弥生人たちの住居こそ未確認であるが第1～4次調査地付近にあったことはほぼ疑いなかろう。

さて、図10は、京都盆地北部の代表的な弥生時代集落と地形条件を重ねたものである。深草遺跡(23)は、東山丘陵の西縁に発達した扇状地に位置している。南西約3kmの下鳥羽遺跡(27)は、京都盆地最古の集落で低地にある。深草遺跡は、下鳥羽遺跡から少し遅れて構えられた弥生集団のムラで豊かな伏流水と安定した環境をもつ扇状地に居住地を構えたと見られる。

深草ムラの弥生集団は、広域的な活動と生業にも関与していたようだ。中期初頭のころは、土器様相から東日本からの集団流入が推定できる。人口増によるものか、青銅器生産の拡散によるものか、まだわからないが社会現象と関係する。この時期にムラが最も栄えたことからすれば、近江・東海からの移住者がかなり居住していたのではないかと想像する。彼らの生業を知る資料に玉と木器がある。玉は、碧玉素材を入手し生産していた。他遺跡の例から新潟、北陸、滋賀などの集団を介して、京都盆地でいち早く碧玉を入手し自ら生産もしていた。深草遺跡の木製品は京都の他遺跡と比べ豊富である。その大半が水に関連する溝や川から出土したのは、ムラで自家生産したものを水辺に保管していたからであろう。

このように見てくると、深草弥生遺跡は、京都盆地の本格的な弥生時代の始まりである、中期社会を考える上で極めて重要な遺跡と評価できるのである。(了)

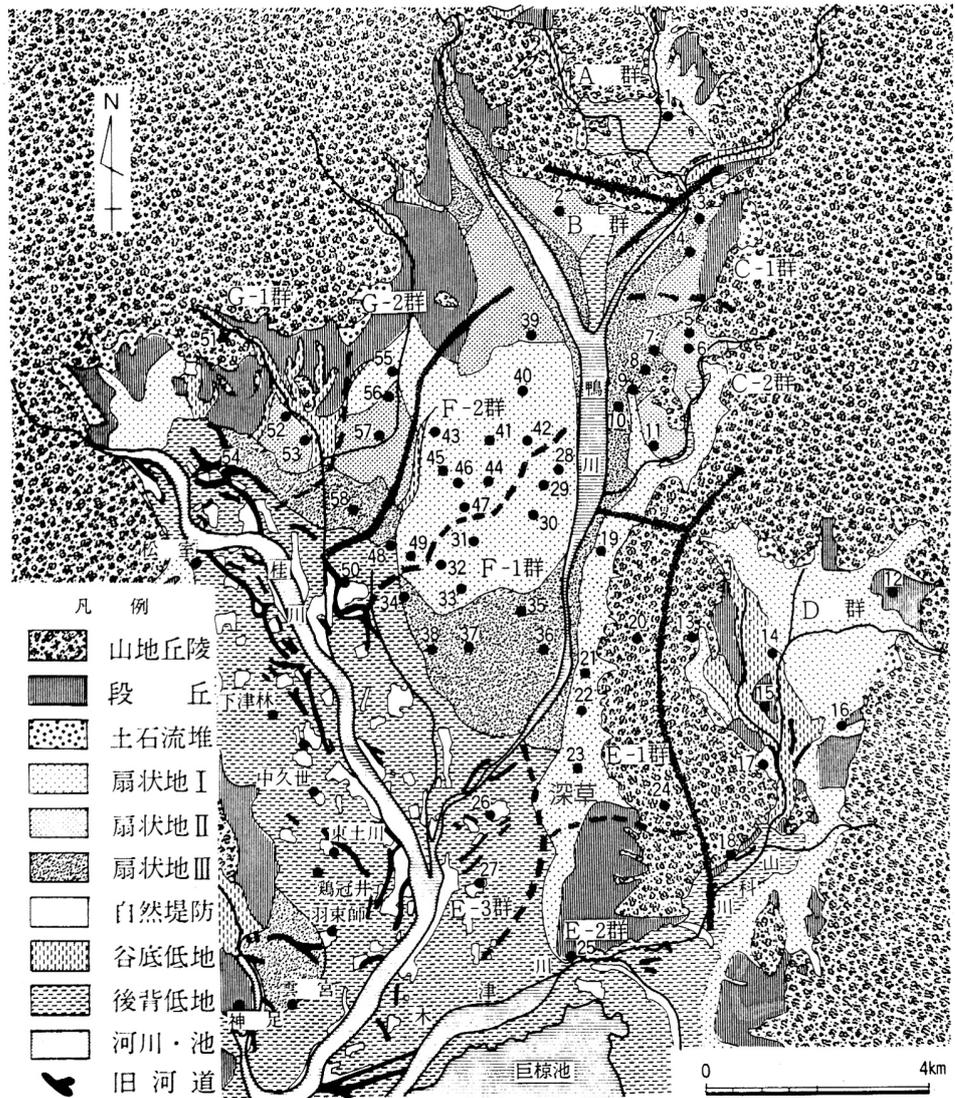


図10 京都盆地の弥生時代遺跡 (縮尺1/15万、伊藤1995に加筆)

文献註 辻井喜一郎1954「京都市南郊深草低地に於ける弥生式遺跡の発見と遺物」『史迹と美術』244号、史迹美術同好会。/杉原社介・大塚初重1961「京都府深草遺跡」『日本農耕文化の生成』日本考古学協会編東京堂出版。/網干善教1965「深草弥生式遺跡の調査」『龍谷史壇』第54号 龍谷大学史学会。/網干善教1965「深草遺跡出土木製鏃の一例について」『龍谷史壇』第55号 龍谷大学史学会。/町田章1979「木器の製作と役割」『日本考古学を学ぶ』(2)有斐閣選書。/黒沢浩1991「弥生時代石器の基礎的研究(1)ー京都府深草遺跡の石器ー」『明治大学考古学博物館報』6/樋上昇2016『樹木と暮らす古代人』(歴史文化ライブラリー434)吉川弘文館。森岡秀人2004「農耕社会の成立」『日本史講座』第1巻 東京大学出版会。/石川日出志2010『農耕社会の成立』(シリーズ日本古代史①)岩波新書(新赤版)。藤尾慎一郎2015『弥生時代の歴史』講談社現代新書。/木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究2013(平成25)～2016(平成28)年度科学研究費助成事業研究成果報告書 2017年 同志社大学資料館。